『土』に就て

――長塚節著『土』序――

夏目漱石

「土」が「東京朝日」に連載されたのは一昨年の事である。そうして其責任者は余であった。所が不幸にも余は「土」の完結を見ないうちに病気に罹（かか）って、新聞を手にする自由を失ったぎり、又「土」の作者を思い出す機会を有（も）たなかった。

　当初五六十回の予定であった「土」は、同時に意外の長篇として発達していた。途中で話の緒口（いとぐち）を忘れた余は、再びそれを取り上げて、矢鱈（やたら）な区切から改めて読み出す勇気を鼓舞しにくかったので、つい夫限（それぎり）に打（う）ち遣（や）ったようなものの、腹のなかでは私（ひそ）かに作者の根

気と精力に驚ろいていた。「土」は何でも百五六十回に至って漸（ようや）く結末に達したのである。

　冷淡な世間と多忙な余は其後久しく「土」の事を忘れていた。所がある時此間亡（な）くなった池辺君に会って偶然話頭が小説に及んだ折、池辺君は何故（なぜ）「土」は出版にならないのだろうと云って、大分長塚君の作を褒（ほ）めていた。池辺君は其当時「朝日」の主筆だったので「土」は始から仕舞迄（しまいまで）眼を通したのである。其上池辺君は自分で文学を知らないと云いながら、其実摯実（しじつ）な批評眼をもって「土」を根気よく読み通したのである。余は出版界の不景気のために「土」の単行本が出る時

機がまだ来ないのだろうと答えて置いた。其時心のうちでは、随分「土」に比べると詰らないものも公けにされる今日だから、出来るなら何時か書物に纏めて置いたら作者の為に好かろうと思ったが、不親切な余は其日が過ぎると、又「土」の事を丸で忘れて仕舞った。

すると此春になって長塚君が突然尋ねて来て、漸く本屋が「土」を引受ける事になったから、序を書いて呉れまいかという依頼である。余は其時自分の小説を毎日一回ずつ書いていたので、「土」を読み返す暇がなかった。已を得ず自分の仕事が済む迄待ってくれと答えた。すると長塚君は池辺君の序も欲しいから序で

に紹介して貰いたいと云うので、余はすぐ承知した。余の名刺を持って「土」の作者が池辺君の玄関に立ったのは、池辺君の母堂が死んで丁度三十五日に相当する日とかで、長塚君はただ立ちながら用事丈を頼んで帰ったそうであるが、それから三日して肝心の池辺君も突然亡くなって仕舞ったから、同君の序はとうとう手に入らなかったのである。

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を読み出した。思ったよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く業を卒えて考えて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元来が安

価な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、此「土」に於ても全くそうであった。先ず何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思った。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだろうと物色して見た。すると矢張誰にも書けそうにないという結論に達した。

尤も誰にも書けないと云うのは、文を遣る技倆の点や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫れ丈の意味で誰も長塚君に及ばないというなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を担ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても

作者の迷惑になる計（ばかり）である。余の誰も及ばないというのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上っていないという意味なのである。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆（うじ）同様に憐（あわ）れな百姓の生活である。先祖以来茨城の結城郡（ゆうきぐん）に居を移した地方の豪族として、多数の小作人を使用する長塚君は、彼等の獣類に近き、恐るべく困憊（こんぱい）を極（きわ）めた生活状態を、一から十迄誠実に此「土」の中に収め尽したのである。

彼等の下卑で、浅薄で、迷信が強くて、無邪気で、狡猾(こうかつ)で、無欲で、強欲で、殆(ほと)んど余等（今の文壇の作家を悉(ことごと)く含む）の想像にさえ上りがたい所を、ありありと眼に映るように描写したのが「土」である。そうして「土」は長塚君以外に何人も手を着けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獣類に接近した部分を、精細に直叙したものであるから、誰も及ばないと云うのである。

　人事を離れた天然に就(つ)いても、前同様の批評を如何(いか)な読者も容易に肯(うけが)わなければ済(す)まぬ程、作者は鬼怒川(きぬがわ)沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を綿

密に研究している。畠（はたけ）のもの、畔（あぜ）に立つ榛（はん）の木、蛙（かえる）の声、鳥の音、苟（いやし）くも彼の郷土に存在する自然なら、一点一画の微に至る迄悉（ことごと）く其地方の特色を具（そな）えて叙述の筆に上っている。だから何処（どこ）に何（ど）う出て来ても必ず独特（ユニーク）である。其独特（ユニーク）な点を、普通の作家の手に成った自然の描写の平凡なのに比べて、余は誰も及ばないというのである。余は彼の独特（ユニーク）なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞（しま）う失敗を歎じた位、彼は精緻（せいち）な自然の観察者である。

作としての「土」は、寧（むし）ろ苦しい読みものである。

決して面白いから読めとは云い悪(にく)い。第一に作中の人物の使う言葉が余等には余り縁の遠い方言から成り立っている。第二に結構が大きい割に、年代が前後数年にわたる割に、周囲に平たく発達したがる話が、筋をくっきりと描いて深くなりつつ前へ進んで行かない。だから全体として読者に加速度(アクセレレーション)の興味を与えない。だから事件が錯綜纏綿(さくそうてんめん)して縺(もつ)れながら読者をぐいぐい引込んで行くよりも、其地方の年中行事を怠(おこた)りなく丹念に平叙して行くうちに、作者の拵(こし)らえた人物が断続的に活躍すると云った方が適当になって来る。其所(そこ)に聊(いささ)か人を魅する牽引力(けんいんりょく)を失う恐が潜(ひそ)んでいるとい

う意味でも読みづらい。然し是等（これら）は単に皮相の意味に於て読みづらいので、余の所謂（いわゆる）読みづらいという本意は、篇中の人物の心なり行なりが、ただ圧迫と不安と苦痛を読者に与える丈（だけ）で、毫（ごう）も神の作ってくれた幸福な人間であるという刺戟（しげき）と安慰を与え得ないからである。悲劇は恐しいに違ない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの償（つぐな）いがあるので、読者は涙の犠牲を喜こぶのである。が、「土」に至っては涙さえ出されない苦しさである。雨の降らない代りに生涯（しょうがい）照りっこない天気と同じ苦痛である。ただ土の下へ心が沈む丈（だけ）で、人情から云っても道義心から云っ

ても、殆（ほと）んど此圧迫の賠償（ばいしょう）として何物も与えられていない。ただ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行く丈である。

「土」を読むものは、屹度（きっと）自分も泥の中を引（ひ）き摺（ず）られるような気がするだろう。余もそう云う感じがした。或者は何故（なぜ）長塚君はこんな読みづらいものを書いたのだと疑がうかも知れない。そんな人に対して余はただ一言、斯様（かよう）な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠（ほどとお）からぬ田舎（いなか）に住んで居るという悲惨な事実を、ひしと一度は胸の底に抱（だ）き締（し）めて見たら、公等の是から先の人生観の上に、又公等の日常の

行動の上に、何かの参考として利益を与えはしまいかと聞きたい。余はとくに歓楽に憧憬（しょうけい）する若い男や若い女が、読み苦しいのを我慢して、此「土」を読む勇気を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年頃になって、音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと云い募（つの）る時分になったら、余は是非此「土」を読ましたいと思って居る。娘は屹度（きっと）厭（いや）だというに違ない。より多くの興味を感ずる恋愛小説と取り換えて呉（く）れというに違ない。けれども余は其時娘に向って、面白いから読めというのではない。苦しいから読めというのだと告げたいと思って居る。参考の為だから、世間を知る為

だから、知って己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる為だから我慢して読めと忠告したいと思って居る。何も考えずに暖かく成長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心（ぼだいしん）や宗教心は、皆此暗い影の奥から射して来るのだと余は固く信じて居るからである。

長塚君の書き方は何処迄（どこまで）も沈着である。其人物は皆有（あり）の儘（まま）である。話の筋は全く自然である。余が「土」を「朝日」に載（の）せ始めた時、北のSという人がわざわざ書を余のもとに寄せて、長塚君が旅行して彼と面会した折の議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「満韓ところどころ」というものをS

の所で一回読んで、漱石という男は人を馬鹿にして居るといって大いに憤慨したそうである。漱石に限らず一体「朝日新聞」の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云って罵(ののし)ったそうである。成程(なるほど)真面目(まじめ)に老成した、殆(ほと)んど厳粛という文字を以(もっ)て形容して然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤(もっと)もの事である。「満韓ところどころ」抔(など)が君の気色を害したのは左(さ)もあるべきだと思う。然(しか)し君から軽佻(けいちょう)の疑を受けた余にも、真面目な「土」を読む眼はあるのである。だから此序を書くのである。長塚君はたまたま「満韓ところどころ」の一回を見て余の浮薄を憤(いきどお)ったのだろう

が、同じ余の手になった外（ほか）のものに偶然眼を触れたら、或は反対の感を起すかも知れない。もし余が徹頭徹尾「満韓ところどころ」のうちで、長塚君の気に入らない一回を以て終始するならば、到底（とうてい）長塚君の「土」の為に是程（これほど）言辞を費やす事は出来ない理窟（りくつ）だからである。

長塚君は不幸にして喉頭結核にかかって、此間迄東京で入院生活をして居たが、今は養生旁（かたがた）旅行の途にある。先達（せんだっ）てかねて紹介して置いた福岡大学の久保博士からの来書に、長塚君が診察を依頼に見えたとあるから、今頃は九州に居るだろう。余は出版の時機に後（おく）れないで、病中の君の為に、「土」に就いて是丈（これだけ）の事を

言い得たのを喜こぶのである。余がかつて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを読む義務はないと云ったと、わざわざ余に報知して来たものがあった。此時余は此文士は何の為に罪もない「土」の作家を侮辱するのだろうと思って苦々(にがにが)しい不愉快を感じた。理窟(りくつ)から云って、読まねばならない義務のある小説というものは、其小説の校正者か、内務省の検閲官以外にそうあろう筈(はず)がない。わざわざ断わらんでも厭(いや)なら厭で黙って読まずに居れば夫迄(それまで)である。もし又名の知れない人の書いたものだから読む義務はないと云うなら、其人は只(ただ)名前丈(だけ)で小説を読む、

内容などには頓着しない、門外漢と一般である。文士ならば同業の人に対して、たとい無名氏にせよ、今少しの同情と尊敬があって然るべきだと思う。余は「土」の作者が病気だから、此場合には猶お更らそう云いたいのである。

明治四十五年五月

底本：「筑摩全集類聚版　夏目漱石全集　10」筑摩書房
１９７２（昭和47）年１月10日第１刷発行
入力：Nana ohbe
校正：米田進
２００２年４月27日作成
２００３年５月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。